

「春の台湾研修 2025」 参加報告：

台北医学大学／The Study Program for 2025 March

Inbound Students at College of Nursing, TMU

研修期間 2025 年 3 月 9 日（日）～3 月 22 日（土）



2025 年 7 月 14 日

沖縄県立看護大学

国際交流室運営委員会

目次

はじめに	1
------------	---

学生所感（学籍番号順）※表記は参加者氏名のイニシャル	2
----------------------------------	---

・ C.K

・ M.N

・ F.M

・ A.S

資料	12
----------	----

1. プログラム（日程表）

2. 写真

【2025 年度国際交流室運営委員会メンバー（敬称略）】

謝花小百合（委員長）

山口賢一（副委員長）

山城綾子

眞浦有希

知念久美子

下中壽美

宮城裕子

伊波良剛

屋宜佳成

はじめに「越境するまなざし－文化的感受性を育む旅」

「真の発見の旅とは、新しい景色を探すことではなく、新しい目で見ることにある。」

フランスの作家マルセル・ブルーストのこの言葉は、異文化に身を置くことの本質を静かに教えてくれます。

2025 年春、本学の学生 4 名が台湾での看護研修に参加しました。高齢者ケアにおけるテクノロジーの活用、認知症ケアを支える環境づくり、文化に根差した産後支援のあり方、そして地域の健康増進活動など、学生たちは多様なケアの実践に触れる機会を得ました。異なる国の制度や技術を見聞することだけではなく、自身の価値観を相対化し、医療・ケアに対する見方を再構成する経験こそ、本研修で学生たちが得た大きな学びだったのではないかと思います。

異文化に触れることは、自己と他者との境界を問い直す営みであると言えます。言語や生活習慣の差異に戸惑いながら相互理解を試みるなかで、学生たちは異なる他者との対話的関係性の重要性を実感しています。異文化理解の過程で育まれる文化的感受性は、看護実践において不可欠な資質の一つです。それは、海外にルーツをもつ人々へのケアに限らず、病いや障害、老い、死とともにある多様な生のあり様を受け止め支援する上で、重要な倫理的・実践的基盤となるものです。

今日、「多文化」とは国籍や民族、言語の違いとどまらず、宗教、性のあり方、病いや障害とともに生きること、世代間の価値観、社会経済的背景など、複合的な差異を包含する概念へと拡張されつつあります。看護の現場はまさに、そうした多様性と日々向き合う場であり、そのなかでいかに他者と共に生き、共にケアを構築するかが問われています。

本研修での経験は、学生たちが看護職として他者の語りに耳を傾け、異なる文脈を生きる人々と出会う姿勢を養う契機となるものでした。学生たちが綴った言葉の中には、越境的な学びを通して得られた「新しい目」による気づきが確かに息づいています。読者の皆様には、これからのケアの実践を担う学生たちのまなざしの変容とその意義を、感じ取っていただければ幸いです。

国際交流室運営委員会

参加報告書編集担当

眞浦有希

学生所感

【C.K. (参加時 2 年生)】

○プログラムを通して学び成長できたこと

台湾での看護研修プログラムを通じて、看護に対する文化的背景の違いについて学ぶ機会がありました。特に印象的だったのは中国文化における産後ケアに関するプログラムです。このプログラムでは、「坐月子（ズオユエズ）」と呼ばれる産後の母体が回復するための伝統的な習慣について学びました。出産後の母親は約一カ月間、特定の行動を控えて体を休め、回復を図るという文化的習慣があり、具体的には、髪を洗うこと、冷たい水を飲むこと、歯磨きをすること、果物を食べること、長時間水に触れること、泣くこと、動き回ることなどの行動が制限されていることを知りました。これらの行動を控えることは、産後の母親が非常にデリケートであり、冷えや疲労が後の健康に悪影響を及ぼすという伝統的な考えに基づいているということを学びました。日本では一般的ではない産後の過ごし方や価値観に触れたことで、国や地域によって生活や健康に関する考え方の違いがあることを改めて実感しました。この学びから、患者さん一人ひとりの生活の背景や考え方を尊重しながら関わり、ケアを提供する姿勢が大事であると考えました。もうひとつ印象的だったプログラムは『Virtual Reality Home Environment』というもので、白内障や加齢黄斑変性症を抱える方の視野を疑似体験するというプログラムでした。単なる「障害の不便さ」ではなく、「環境が整備されていることで生活がどれほど快適になるのか」という点に焦点が当てられていました。例えば、家の家具の配置やお風呂場の設計、車椅子に座ったままでも操作しやすいクローゼットや棚の設計など、視覚障害や車椅子利用者にとって暮らしやすい環境がどのようなものなのかを実際に感じることができました。一方で、私たちの大学で行う障害体験は、片麻痺や視覚障害による日常生活の「不便さ」に着目しています。片手で洋服を着てみたり、視界が見えにくくなるゴーグルを着用して歩いたり、階段の上り下りをするなど、身体の不自由を持つ方の苦労や不自由さを疑似体験しています。自分の大学での経験と台湾での VR 体験を通して、「支援の在り方」に対する視野が広がったと感じています。これまでも、障害を抱える方の不便さを知ることは大事であると理解していましたが、それだけではなく、生活の質を高めるための工夫や支援環境の整備をどのようにするのかを考えることも大切だということをこの海外研修を通して学びました。この学びから、今後の実習や看護の現場でも不便さを共感しつつ、どうすれば

患者さんの生活をより快適にできるかを考える姿勢を大切にしていきたいと感じています。

○課外活動を通して学び成長したこと

現地の学生やスタッフ、街の人などと英語でコミュニケーションを取る機会が多くありました。最初は自分の言いたいことがうまく伝わらなかったり、相手の話が聴きとれず、戸惑いや口惜しさを感じることもありました。しかし、そのなかで「完璧な英語を話そう」とするのではなく、「伝えたい」「伝わってほしい」という気持ちを大切にしながら、知っている単語を並べたり、身振り手振りを交えたりしながらなんとか思いを伝えようと努力してみました。その結果、少しずつ相手に伝わるようになり、笑顔で返してもらえたり、会話が続いたことで「言いたいことが伝わった」という喜びや達成感を味わうことができました。完璧でなくても、伝えたい気持ちや意思があれば相手に届くということを実感し、それが自分の中でも自信に繋がりました。この経験を通して、コミュニケーションをとる時には語学力だけではなく、伝えようとする意志の強さも大切であることを学ぶことができました。看護学生・看護師として、患者さんと接する際には「相手に寄り添う気持ち」が大切であるため、言語や文化が異なり言葉がうまく通じない場合でも、諦めずに伝えようとする姿勢を大事にして、患者さんのケアに深く携われる人になりたいと感じました。また、プログラムの初めの講義では聞き取れなかった英語も、集中して聞くことで、プログラムの後半には少しずつ理解できるようになりました。私はこの研修で「聞く力」が身につき、相手の話を聞き取ろうとする姿勢も身についたと感じています。看護の現場では、患者さんの情報収集をしたり、要望に沿った看護を提供したりする際にコミュニケーションをとることは必要不可欠なものです。そのため、患者さんの訴えをより正確に理解し、必要なサポートを適切に提供できるように、今回の経験で学んだことや身につけたことを、これからの実習に活かしていきたいと考えています。

○現地で困ったこと&来年度の研修への提言

台湾での研修中、トイレの使用方法について少し戸惑うことがありました。台湾では、トイレットペーパーを流すことができず、ほとんどのトイレではゴミ箱に捨てなければならないというルールがあるため、初めてそのことを知った時には驚きました。一部、環境

が整っているところではトイレにそのままペーパーを流しても良いという場所もありました。また、飲食店や観光地のトイレでは、ティッシュやトイレットペーパーが常備されていないことが多く、特に有名な観光地である九份のトイレにはどこにもペーパーがないという状況に遭遇してしまいました。偶然にも私はポケットティッシュを持っていたため、それを使用してその場を乗り越えることができましたが、準備していなかったらとても困っていたと思います。そのため、台湾に行く際にはポケットティッシュや手拭きシートを常に持参することがとても需要であると感じました。他にも、台湾のバスには両替機やおつりが出てくる仕組みがないため、運賃を支払う際には必ず「丁度の金額」を用意する必要があります。私は、交通機関カードのチャージが不足していた時に、小銭を余分にもっていなかったため、友達に小銭を貸してもらう必要がありました。そのため、バスを利用する際には事前に交通機関カードに十分なチャージをしておくことが大切だと学びました。交通機関カードはバスや地下鉄以外にもコンビニでも利用できるため、少し多めにチャージしておいても良いのではないかと思います。

【M.N. (参加時 2 年生)】

○プログラムを通して学び成長できたこと

講義

- ・ The trends in Wound Management (創傷管理について)
- ・ Virtual Reality Home Environment (高齢者の家庭を VR で体験)
- ・ Introduction to Doing-The-Month for Postpartum Mothers in Chinese Culture
(中国文化における産後の母親のための月例行事の紹介)
- ・ Gerontechnology and Design Thinking (ジェロンテクノロジーとデザイン思考)
- ・ Development and Prospect of Traditional Chinese Medicine (伝統中国医学)
- ・ Disaster Nursing (災害看護)

中国文化における産後の母親のための月例行事を紹介する講義では、産後一か月のお母さんたちがどのように過ごすのかを学ぶことが出来ました。産後一か月のお母さんたちは、髪や歯を洗うこと、冷たい飲み物を飲むこと、フルーツを食べること、水に長く触れ

ていること、泣くことなどをできるだけ行わず、食事と授乳以外の時間は安静に過ごされていました。

日本では、産後すぐに運動を勧められることが多いことから文化の違いをととても感じました。この講義を受けて、台湾では母体の完全な回復を重要視しており、日本では早期回復・社会復帰などが重要視されており、どちらが良いというわけではなく、それぞれの文化が母親と家族に求める役割や支援体制からきているものだと学びました。

また、台湾のこの文化は家族や地域社会からの支援が充実していることが前提にあり、核家族化や共働きが進む日本では、早期の回復や自立が求められる背景があると考えられます。こういった文化の違いには、さまざまな社会的背景があるのだと学ぶことが出来ました。

伝統中国医学の講義では、鍼灸、吸い玉療法、気功や太極拳などの運動療法、薬膳の食事療法などを知ることが出来ました。中国伝統医学では、身体・心・自然環境が一体であると考えられており、薬膳や太極拳、気功などはそのバランスを整えることによって心身を整える療法であると学びました。

病院ツアー

- ・ Taipei Medical University Hospital（台北医学大学附属病院）
- ・ Shuang Ho Hospital

台湾で生活している中で、車椅子を利用している方が多く見受けられました。市場だけでなく、観光地などでも多く見られたことから、これは、バリアフリーが進んでいるだけでなく、外に出る自由が社会的に支えられているのではないかと考えました。また家族の付き添いも多かったことから、家族のケア参加がより日常的に行われている社会文化であると感じました。

○課外活動を通して学び成長できたこと

台湾での研修を通して、コミュニケーションやマナー、食文化、現地の人々の人柄、地下鉄の利用方法など、さまざまな貴重な経験を通して学ぶことが出来ました。

特にコミュニケーションでは、お互いが第一言語ではない英語を使っていたため、表情や身振り手振りといったボディーランゲージを積極的に取り入れることで、言葉だけに頼らず、楽しく意思疎通を図ることができました。言葉以上に伝えようとする気持ちが大切であるということを実感しました。また、台湾は朝食文化や屋台文化がとても発達しており、街中には多くの屋台や飲食店が立ち並んでおり、毎日「今日はどこで何を食べよう？」と考えることが楽しみの一つでした。タピオカやルーローハン、小籠包、台湾まぜそばなどはとてもおいしかったのですが、一番印象に残ったのは台湾名物の臭豆腐で、名前の通り独特な匂いがしましたが、実際に食べてみると想像以上に美味しく、現地の人々に愛されている理由がわかりました。台湾の人々はとてもフレンドリーで、エレベーターの中で「日本人ですか？」と日本語で話しかけてくれたり、市場で沖縄から来たと話すとサービスしてくれたり、温かい交流を多く経験しました。その親しみやすさはどこか沖縄の人々に似た雰囲気を感じ、親近感が湧きました。

この研修を通して言語が違うなりのコミュニケーションの方法や現地の食文化などを楽しく学ぶことができました。

○現地で困ったこと&来年度の研修への提言

台湾ではトイレで使用したトイレットペーパーを流せる所と流せない所があったり、トイレットペーパー自体が置いてなかったり、トイレの入り口で自身が使用する分のトイレットペーパーを事前に取りないと行けなかったり、日本では考えられないトイレ事情に当初は戸惑いもありました。ティッシュは常に多めに持っておいたほうが良いとおもいます。

【F.M. (参加時 2 年生)】

今回 2 週間にわたる台湾での研修を通して台湾の医療制度やテクノロジーの活用だけでなく、現地の人々との交流や文化に触れる中で、多くの学びと気づきを得ることができました。研修の中で私は「高齢学」について多くのことを学ぶことができました。台湾は高齢化が進んでいる国の一つであり、社会全体で高齢者を支える仕組みが整えられていると感じました。特に、テクノロジーを活用した高齢者支援の取り組みに強い印象を受けました。たとえば、認知症の高齢者や一人暮らしの方のために、遠隔でバイタルサイン（体温

や心拍、血圧など）を測定・管理できるシステムが導入されていました。これにより、家族や医療スタッフは離れていても健康状態を把握でき、早めに異常に気づくことができていました。その結果、高齢者本人の安心感が高まり、家族の不安や負担も減るという良い効果があると感じました。また、スマートホームと呼ばれる技術を使って、家の中の家電を遠隔で操作できる仕組みも注目されていました。電気のオン・オフやエアコンの調整などをスマートフォンなどから簡単に行うことができ、高齢者の生活をより安全で快適にすることができます。こうした環境があることで、たとえ一人暮らしであっても、自立した生活を続けやすくなります。この研修を通して、テクノロジーはただ便利なものというだけでなく、高齢者が安心して、尊厳を保ちながら暮らしていくために大切な存在であることを改めて感じました。高齢化が進む社会の中で、人と人とのつながりと同じように、技術の力もまた、高齢者の暮らしを支えていることに気づかされました。

次に印象に残ったプログラムは、認知症病棟の見学でした。訪れた病院では、認知症の患者さんが安心して診察を受けられるように、外来エリアの壁が昔の映画館のように装飾されており、懐かしさを感じさせる工夫がされていました。病院という場所に対する緊張や不安を和らげ、親しみやすい空間をつくることで、患者さんが自然に足を運びやすくなるよう配慮されていると感じました。また、病棟の壁は落ち着いた緑色で統一されており、視覚的に穏やかな気持ちになれるように設計がされていました。さらに、病棟内にある広場には支柱が木のようにデザインされており、自然の中にいるような雰囲気を出していました。こうした空間づくりによって、患者さんに「昔のような暮らしをしている」感覚を与え、病院での生活の中でもできるだけ安心して過ごしてもらえるような工夫が随所に見られました。このように、医療だけでなく環境面からも認知症の方に配慮した取り組みがされていることに感銘を受けました。患者さんの気持ちに寄り添いながら設計された空間から、医療のあり方について改めて考えさせられる体験となりました。

台湾研修の課外活動では、毎日違う食事を楽しみながら、台湾の観光名所を訪れ、とても貴重な体験をしました。食べ物では、台北駅近くにあるルーローハンのお店が一番おいしく、何度も通いたくなる味でした。また、飲み物では、台北駅地下街にある milksha のタピオカが特に美味しく、今までミルクティー嫌いだったのが台湾にきてハマってしまいました。観光地では、台湾で最も有名な 101 タワーに登り、高さ 508 メートルからの夜景を楽しみました。今まで見た夜景の中で一番綺麗だと感じ、台湾の美しい夜景を心に刻

むことができました。また、日本では体験できない夜市の賑やかな雰囲気や、台湾ならではの食文化にも触れることができました。さまざまな屋台や食べ物が並ぶ夜市では、現地の人々との交流も楽しみながら、台湾の豊かな文化を肌で感じることができました。台湾の食文化や観光地を訪れることで、日常では味わえない体験をすることができ、充実した時間を過ごすことができました。

現地で困ったこととして、コンビニにトイレがないことが多く、歩きながらトイレを探したり、トイレットペーパーがない場所もあったことです。しかし、そのことも含めて、台湾での研修は学生のうちにしか経験できない貴重な体験だと感じました。もし少しでも研修に興味があるのであれば、ぜひ行くべきだと思いました。台湾の人々との英語での交流だけでなく、日本の他の大学の学生とも関わり、忘れられない思い出を作ることができるので、絶対におすすめします。

【A.S. (参加時 1 年生)】

1. プログラムを通して学んだこと（特に印象に残ったこと）

・ Visiting health management center

研修 2 日目に、台北の健康管理センターを訪れた。ここでは、医療保険制度や、台北が積極的に実施している健康増進イベントについて学んだ。

台湾では、全民健康保険という制度を採用しているが、これは日本の国民健康保険に相当する。内容はほとんど日本の健康保険制度と変わらず、従事する職業によって医療費の負担割合が異なる。公務員・私立学校教職員・第一次産業従事者・退役軍人の家族などは 3 割負担、軍人・軍人学生・退役軍人本人・低所得者は医療費免除、自営業者・職業工会会員などは全額負担もしくは 6 割負担となる。また、4 か月以上台湾に滞在する外国人は、全民健康保険に加入する必要がある。日本では、年齢によって医療費の負担額が異なるが、台湾との制度の違いを知ることができた。

今回訪れた健康管理センターには、12 名の看護師が在籍していた。台湾では、看護師が保健師の役割を担うと考えられており、保健師という名称は用いられていない。日本と異なり、看護師免許を有しているだけで日本より幅広い就職先がある。しかし、病院、保健所、学校など、それぞれの場所での働き方やニーズは異なるので、入職後の新人サポートはどのように行っているのか気になった。

台湾では、儒学者である孔子を崇拝しており、いたるところに孔子廟があった。場所によっては、ウォーキングに適した広さをもつ孔子廟もあるため、文化学習と並行してウォーキングを行うイベントも開催されている。現地で説明を受けた際の発表スライドに添付された写真を見ると、参加者は年配の方が多く、様々な世代にどのようにアプローチするかは、日本と共通の課題だと考えられた。

・ Visiting Taiwanese hospital

研修4日目と7日目に、Taipei Medical University, Shuang Ho Hospital を訪問した。ナースステーションを見学した際、デスク周りは整理され紙類がなかったことに驚いた。台湾の病院ではデジタル化が進んでおり、カルテや問診、検査結果だけでなく、薬の管理も機械化されていた。特に薬の管理を行う機械は引き出しのような構造になっており、パスワードが設定され厳重に管理されていた。また、ほかの患者の薬が混入しないように、患者毎に専用の引き出しが使用され、区別するための仕切りを設けるなどの工夫も行われていた。

認知症病棟では、なるべく病院だと感じられないような、家に近い環境がつけられている。台湾の一般的な家庭の壁に飾られるお守りが、病棟の入り口にも飾られていた。また、暖色照明が使用され、広い談話室が設置されていた。現地の職員が一番工夫していると語っていたのが、各部屋を識別するための名前だった。認知症をもつ人は数字を覚えることが困難なため、部屋の入口には果物や動物のイラストが描かれている。「〇号室」ではなく「りんごの部屋」と伝えることで、認知症をもつ人も自分の部屋を理解して戻ることができるという説明を受けた。そのように症状に合わせた様々な病棟の工夫を学ぶことができた。談話室にあるテーブルは、転倒時のけがを防ぐために角がない設計になっていた。また、精神科や心療内科で認知症の治療を行うのではなく、「認知症科」という独立した診療科を設けることで、より専門的で高度な治療が受けられ、患者の負担も軽減することができることを学んだ。

2. 課外活動を通して学び成長できたこと

・ 貧富の差

台湾が抱える貧富の差に関する問題は、空港から滞在ホテルまで向かっていた初日に感じたことだ。台北駅周辺や高層ビルが立ち並ぶエリアは華やかで、そこですれ違う人の服やかばんは高級ブランドであることが多かった。

しかし、桃園国際空港から台北駅まで電車で向かっているときに見た景色では、茶色く背の低い住宅街が密集するエリアも数カ所あった。街中ではスクーターが主な交通手段であるようだったが、わずかながら見かける自家用車は海外の高級な自動車ばかりだった。夜になると台北駅周辺の広場には路上で生活する多くの人々が寝床を構えていたが、那覇市の新都心で見える数よりもはるかに多かった。

台湾には九份など豪華な観光スポットを求めて世界中から人々が訪れているが、都市のなかには生活に困窮する人々も多いと知ることができた。華やかな側面だけではない社会の課題がすぐそばにある現実を目の当たりにした。

・食事のマナー

現地の学生と交流して日本と大きく異なると感じたのは、食事のマナーだった。箸の持ち方や、食事を残す量が多いことなどが気になった。食事のマナーからその人について判断してしまう私にとって、良い印象をもつことができなかった。

調べてみると、日本では、昔ながらの「侘び寂び」や思いやりの精神から、一緒に食事をしている相手、料理を作った相手に敬意をあらわすためにマナーが確立されたと考えられている。しかし、中華圏では、厳密なマナーはないと現地の学生が教えてくれた。また、出された食事を残すことも、「食べきれないくらいおいしい食事をたくさん食べることができた」という、料理を作った相手に対する敬意として考えられているようだった。現地の学生と接して初めて知り、一番のカルチャーショックだった。

それと同時に、「なぜこんなにも日本と異なるのだろう」と、異なる文化について知りたいという思いを養う経験にもなった。日本を訪れたことがある学生は、「日本に行ったら自分の食事をとる姿勢を見直すきっかけになった」と教えてくれた。

3. 現地で困ったこと・来年度の研修への提言

・劣等感

私は、アルバイトで高校生に英語を教える塾講師をしている。そのため、ある程度英語力には自信があった。しかし、台湾の学生と話してみて一番感じたのは、彼らにとって「英語は理解できて当たり前。話せて当たり前」という認識だ。そんな彼らと会話するとき、カタコトな会話で、翻訳アプリに頼っていた自分がとても情けなく感じた。また、英語だけでなく、独学で他の外国語を勉強している学生も多く、私とほぼ同じ年齢で日本語能力試験のN1を取得している学生もいた。

もっと英語力を身に着けていたら、より収穫のある研修になったのではないかと後悔した。今後このような研修に参加する学生に同じ後悔をしてほしくないので、英語力を日々鍛えることを強く勧める。私は今回の研修終了後、SNSの連絡先を交換した学生とたくさんコミュニケーション取りたいと思い、英語だけでなく中国語も勉強している。

・食事

日本の味付けに慣れているため、香辛料やスパイスの風味が強い料理に対して、最初強い抵抗感を抱いていた。台湾には日本の飲食チェーン店が多く、これらを利用しながら慣れていくことができた。日本にいたときから、台湾料理店に行ったり、香辛料やスパイスを用いた料理を作ってみたりしていれば、台湾の食文化をさらに楽しむことができたのではないと思う。

資料

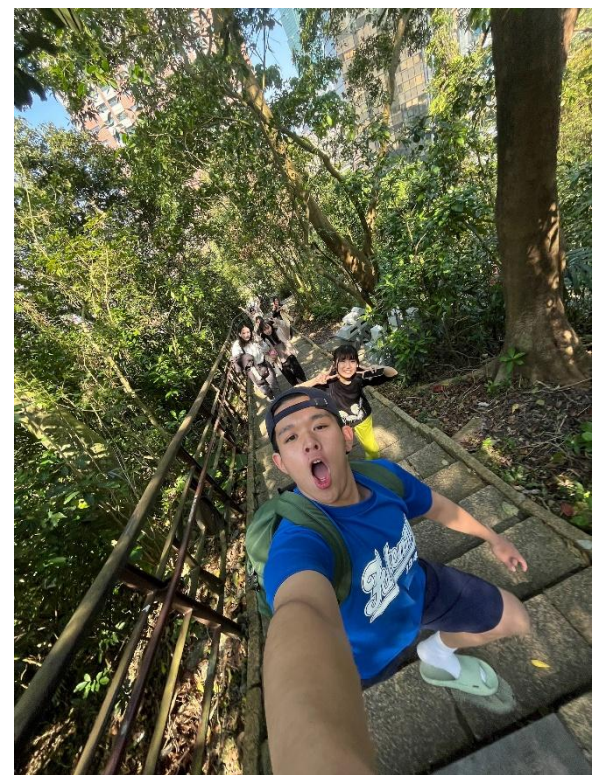
1. プログラム（日程表）

Program Schedule

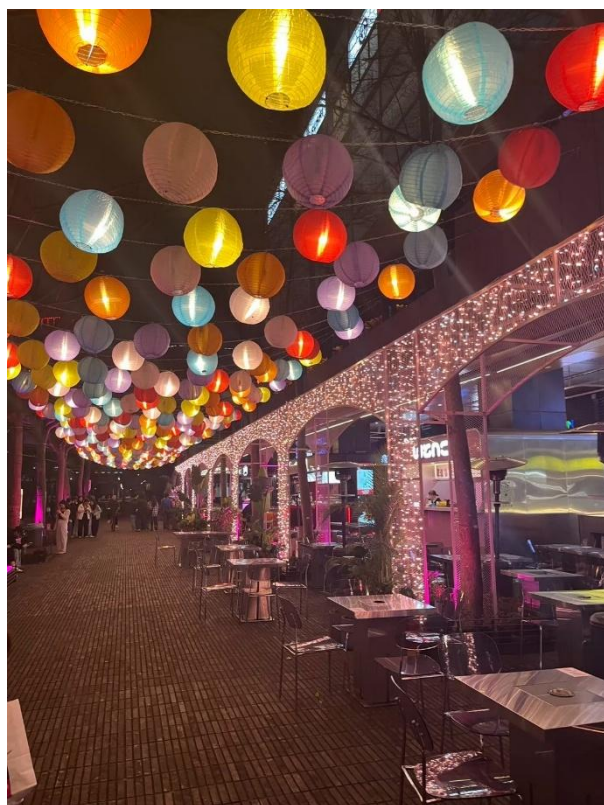
The Study Program for 2025 March Inbound Students at College of Nursing, TMU
(2025/3/10-2025/3/21)

Week	Day	Schedule
Week One	3/10(Mon)	<ul style="list-style-type: none"> ●Opening Remarks ●Program Briefing by the Director ●Introduction to College of Nursing at TMU & Taipei Overview ●Introduction to Inbound Universities (about 10 minutes by each group)
		Welcome Lunch
	3/11 (Tue)	<ul style="list-style-type: none"> ●Library Tour ●History Gallery ●Campus Tour
		Visiting Health Management Center
	3/12 (Wed)	Lecture: Sarcopenia
		Lecture: Wound Care
	3/13 (Thu)	Lecture: Virtual Reality Home Environment
		Taipei Medical University Hospital Tour
	3/14 (Fri)	Lecture: Postpartum Confinement “Doing-the-month”
		Wan Fang Hospital Tour
Week Two	3/17 (Mon)	Lecture: Gerontechnology and Design Thinking
		Lecture: Development and Prospect of Traditional Chinese Medicine
	3/18 (Tue)	Lecture: Long-term care in Taiwan
		Shuang Ho Hospital Tour
	3/19 (Wed)	Culture Tour
	3/20 (Thu)	Lecture: Disaster Nursing
	3/21 (Fri)	Final Presentation and Evaluation

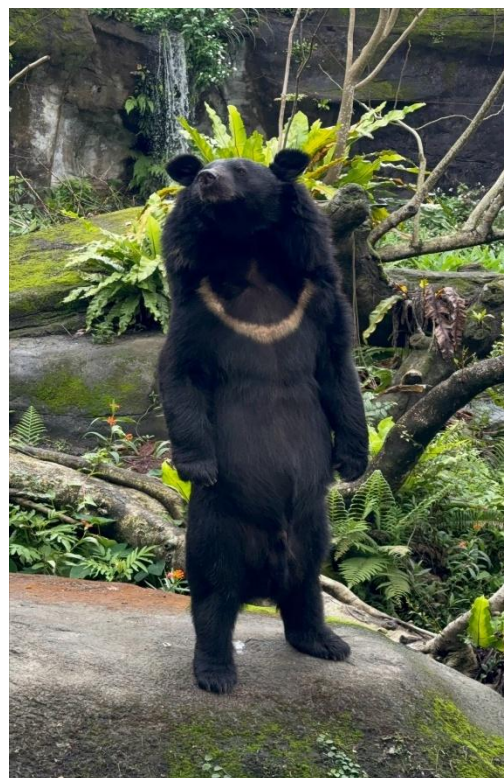
2. 写真



●台北孔子廟／国立故宮博物院／台北 101／象山自然步道



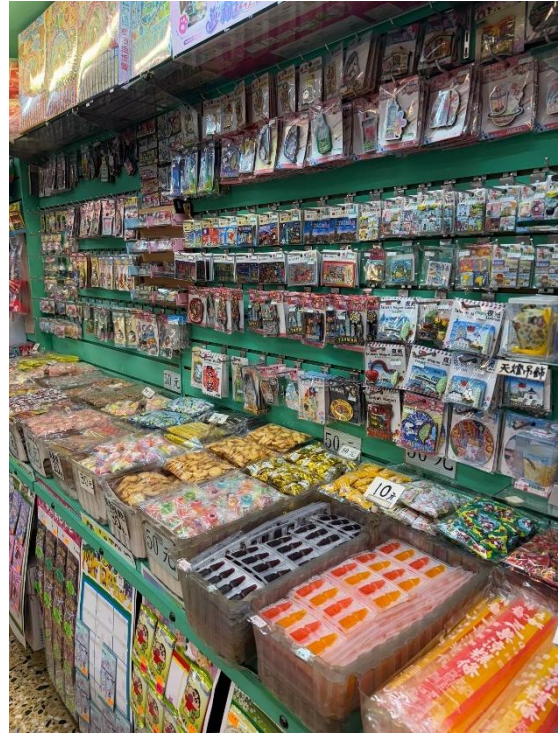
●九份／迪化街／寧夏夜市



● 台北市動物園



●台湾での食事



●淡水駅と周辺の店

3. 研修後の参加者へのアンケート調査結果（回答者 3 名）

1. 研修全体の満足度を教えてください

- ・とても満足 3 名

2. 研修参加した際の経済的負担についてどのように感じたか教えてください

- ・かなり負担であった 1 名
- ・やや負担であった 2 名

3. 研修参加費用はどのように準備したか教えてください

- ・保護者や家族からの援助 1 名
- ・自身のアルバイト 2 名

4. 研修に参加してよかったことを教えてください（プログラムの内容や体験など）

- ・日本とは違う医療のサポートを知ることができ、簡単には行けない海外で違う言語や文化と触れ合うことができたこと。
- ・まだ自分の大学では習っていなかったドレッシング剤について、今回のプログラムで学ぶことができた。病棟の見学やカンファレンスの参加もとても貴重だった。
- ・現地の学生さんが積極的に交流する機会を設けてくださり、現地の文化も一緒に学ぶことができた。

5. 研修に参加して困ったことや不満に感じたことを教えてください（プログラムの内容や体験など）

- ・助成金が少なく感じます。
- ・助成金はもう少し増やして欲しいと思う。
- ・周りに日本人が多くて、留学しに来た感じがしなかった。

6. その他、改善の提案や感想など、ご自由に記載してください

（記載なし）